

四国ディスカバリー

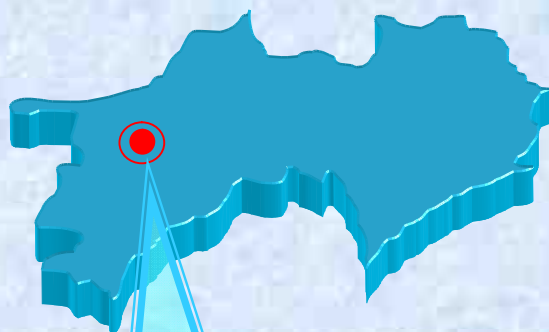
～愛媛県大洲市の酒蔵で地方創生を熱く語っていただきました～

◆養老酒造株式会社の紹介

養老酒造は、大洲市内から肱川を 20 キロほど遡った山中で、大正 10 年の創業から肱川の伏流水を用いて「和醸良酒」を信条とした“心の通い合うお酒、を目指した酒造り”を続けている老舗の酒蔵です。

平成 30 年 7 月に発生した西日本豪雨により、蔵のすぐ近くを流れる肱川が大氾濫し、被害直後は廃業を考えなければならぬほど、設備のほとんどが流失、破壊される被害を受けました。

このような状況のなかでも、社長の山内光郎さんは、いち早く酒蔵再建に向けて動き出し、「地域で酒造りの灯は消してはいけない、酒蔵があることで地域を元気にすることもできる」と熱い気持ちを持ちながら、再建に取り組んでいます。



名 称	養老酒造株式会社
所在地	愛媛県大洲市肱川町山鳥坂 49 番地
設 立	1921 年（大正 10 年）
代表者	山内 光郎（代表取締役）
従業員	2 名
資本金	10 百万円



被災直後の状況を教えてください

被災当日は、親類の結婚式出席のために朝から車で松山空港へ向かっていました。その道中でこれまでに経験のないような豪雨にあい、結婚式への出席を断念したものの引き返すこともできず、立ち往生することになりました。

その後小高い場所で水が引くのを待ち、帰宅をすることができたのは昼過ぎで、その被害の状況に大変驚きました。

酒蔵は床上 3.3 メートルまで浸水しており、酒蔵内に設置した貯蔵タンクは水で持ち上げられ、天井を壊し、糖度計など酒造りに必要な資材や設備はほとんど流失、破損していました。また、重要な資料・書類もすべて水をかぶってしまいました。

さらに建物の土壁が剥がれ落ち、3 棟あった酒蔵の 2 棟と住居は壊滅状態となっていました。その後、それらの建物は危険建物に認定され、公費での取り壊しを余儀なくされました。



【梁の高さまで浸水したことを示す水面の跡】



【被災直後の酒蔵内の写真からは、災害のすさまじさが伝わってきます】

再建を決断した時のことについて教えてください

被災直後は、あまりの被害の大きさに何から手を付けていいかわからず、途方に暮れていましたが、数日のうちにボランティアの方々、酒造組合の仲間たち、地域のソフトボールチーム等、多くの人たちがほぼ毎日被災後の後片付けの手伝いをしてくれました。

真夏の暑い日が続く中、ヘドロの掻き出しなどの大変な作業でいろんな方たちが手伝ってくれる姿を見てると、こんなに**支援してくれる人達がいるのにこのまま酒造りをやめてしまっているのか、どうにかして再建することはできないか**という思いが日増しに強くなりました。

また、何日も空を見ることを忘れるくらいつむいて黙々と片付けを続けていると、ある時ふと毎日何のために大変な作業をしているのかわからなくなっていました。毎日の片づけの先に何か前向きで具体的な目標を設定することでそれに向かって気持ちを奮い立たせて頑張ることができると思い、もう一度酒蔵を再建させたいとの決断に至り、復活に向けて動き出すことにしました。

再建を決断してから今日までのことについて教えてください

まずは破壊された設備等を改めて購入するため、資金集めから行う必要がありました。

失った設備を再度整えるために、グループ補助金の申請を行いました。そして補助金が交付されるまでの資金は、日本政策金融公庫や地元の地方銀行に融資を受けることができました。

また、酒造協同組合の仲間たちは義援金を募ってくれました。さらに、クラウドファンディングなどの資金調達手法があることを知り、設備の一部の再建はクラウドファンディングを活用して再建することとしました。**義援金やクラウドファンディングにより、資金を調達できただけでなく、多くの方の応援の気持ちを感じることができました。**

当初は途方に暮れ、廃業を考えていましたが、このような多くの人とのつながりにより、再スタートを切ることとなりました。



【現在の蔵内には、再建に向けて改めて導入されたたくさんの設備が！！】

その後なんとか酒造りができる設備が少しずつ整っていきましたが、麴造りのための設備の再建は間に合いませんでした。そんなとき、愛媛酒造協同組合の仲間の一人がうちのための麴造りを引き受けて申し出てくれました。

麴づくりは酒の出来を左右する重要な作業であるうえに、昼夜を問わず麴の状況を確認・判断し、状況に応じて手を入れる必要がある大変な作業です。自分の蔵の麴造りだけでも大変なはずなのに、うちの蔵で使用する原料を用いてうちの蔵のための麴を作ることを引き受けてくれたのです。このことには今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

また、三人の息子がそれぞれ被災後に片付けを手伝いに帰ってきてくれていたのですが、松山で酒造りとは無縁の仕事をしていた長男は、片付けをする中で何か思うところがあったのか、後継者として酒蔵を継ぐために帰ってきてくれることになりました。これまで酒造りを継いでほしいといった話をしたこともなく、息子には息子の人生を歩んでほしいと思っていましたが、酒造りを継いでくれるということはやはりうれしいものです。

被災により多くのものを失いましたが、同時に将来に向けた様々なきっかけにもなりました。



【再建中の酒蔵では、麴造りの設備の復活に向けた作業が進行中！！】

地方創生への思いを語ってください

私自身生まれ育ったこの地域に愛着があります。それは私だけでなくこの地域に住む人みんな同じ気持ちだと思います。

被災直後は、私を含め地域のだれもが「もうだめだ」、「もうやめてしまおう」と思ったと思います。

そんな中、復興のために地域に入ってくれた多くのボランティアの方々の支援、県外、県内を問わず寄せられた多くの応援、そしてなにより**地域の中での人と人との強いつながりをあらためて感じ、それが力となりました。**

また、私だけでなく、この地域で商売をする人たちは、私たちがやめてしまうと人は出て行ってしまう、この地域自体がなくなってしまう、だから商売は辞めず、何とか頑張ろうと声を掛け合い、再建しようという思いを持っています。

特に、酒は地域の米、水を原料に、地域の風土の中で出来上がり、古くから地域の神事にも用いられるなど、地域との関りが非常に強いものです。**この地だから作れる酒、そのような酒を造る酒蔵の灯を絶やしたくないという気持ちを持っています。**

私一人の力ではどうにもできなかったことが、多くの人たちのサポートがあったから今がある、今があるからさらに明日も、そしてその先へとつながっていき、そして、被災前にも負けないようなこの地だから作れる酒を目指して、これからも頑張っていきます。

また、その頑張る姿で、**地域の他の方たちを少しでも元気づけることができたという思いを持っています。**



【奇跡的に被災を免れた貴重な数本のうちの一本（風の里純米にぎり）を見せていただきました】



【被災後に当社に寄せられたメッセージ】

<取材後記>

今回は、山内光郎さんから、災害からの復興と地方創生に関する熱い思いを聞かせていただきました。

サポートをしてくれた多くの人たちへの感謝の思いと、被災という困難に負けずに酒造りを続けたいという思い、そして、酒造りを通じて地域の人たちを少しでも元気にしたいという思いがひしひしと伝わりました。

今現在も設備の復旧作業が続く大変な状況の中でも、酒造りと地方創生への熱い思いでひたむきに酒造りに取り組まれている養老酒造さんを今後も注目していきたいと思います。

(原 英作、高瀬 朝代、渡邊 貴大)



掲載している情報は、令和元年6月時点のものです。

掲載している写真の一部は、当社よりご提供いただきました。